

“Heart to Heart”

心から心へ わかちあう あたたかさ

第3巻 第1号

発行日 平成20年7月12日

目次:

経験を通して獲得するもの	1
コラム： 全ての経験は成長の糧 —無駄な勉強は1つも無い—	2
療育プログラムのようす	2・3
コラム：暑中お見舞い申し 上げます	4
セミナー等のご案内	4

経験を通して獲得するもの

今年度は300名を超える子どもたちが療育プログラムを受講しており、センター内はさらに活気が増えています。新年度の学期初めはさまざまな環境の変化があることから、子どもたちにとっては慣れることへのストレスが多い時期です。中にはこうした初めての療育の場に対する不安から大泣きをする子どももいます。それもめめそめそではなく、天地がひっくり返ったように派手に泣きわめきます。しかしこうした騒ぎがいつまでも続くということではなく、何回目かの受講になるとあの騒ぎはなんだったのかと思うほどにケロリと落ちつくのが通例です。プログラムのパターンが予測できるようになると、いつも行うことが今度は楽しみになってきます。たとえば部屋から移動する際にはスタッフルームに一声かけていくことになっていますが、先生の報告をまねて「Aルーム、スカラーホールに行ってきます！」「Bルーム、ピオトープに行ってきます！」などと、次から次へとくり返して伝えてきます。楽しそうでもあり得意そうでもあります。

新しい環境や初めて学ぶことに対しては、我々大人であってもそれなりのストレスを感じます。不安ないしは恐怖感が強かったりこだわりや思い込みが激しかったりする発達障害の子どもの場合、新しい場面の一つひとつに強いストレスを感じるのは当然のことで、その不安なりを大きな泣き声で訴えているわけです。その原因を取り除いて本人の気持ちが和むようにするためには、スモールステップの考え方が必要であったり本人の好きなことや本人の出来る作業を与えてあげることが有効だったりします。教育センターでは、好きな

キャラクターのグッズを見たり少し散歩をしたり、ときには水を一口飲むことでカラリと気分が一新して、グループの活動に加われたりすることがあります。

いずれにしても彼らの経験する日常生活は圧倒的に不安が多いわけですが、本人が自分のとらわれる一つの壁を乗り越えることは、その後の成長の大きな推進力になります。したがって、家庭でも教育の場でも本人がストレスを感じる場面は常に避けたら嫌がたらずく止めさせてしまうという姿勢に終始すると、子どもはいつまでたってもその学びの場をクリアできません。さまざまな働きかけによってこれまでのこだわりが取れたり、それまで我慢できなかったことがスッと受け入れられるようになった時、子どもたちはホッとしたような何か成し遂げたような表情をしています。これはあくまでも、経験を通して本人自身が獲得した学びであり、成長の節目となるものです。親御さんにとっては、わが子が苦労している姿に接することは辛いものです。しかし、多くの子どもたちが、このような経験をいくつも重ね、より広い自分の世界を作り出してきている事実があります。その先の成長を見ずえて関わってくれている存在があるならば、本人が立ち向かっている姿をじっと見守ることも必要でしょう。短絡的に過ぎることなく多少ゆとりのある心をもって、本人の頑張りを応援したいものです。

自閉症児ら発達障害の子どもたちが頼りにする人というのは、どっしりと揺るがない信念に満ちた親であり教師です。

長内博雄(武蔵野東教育センター所長)



七羽の鶴
~お願いごとを短冊に書いて~



コラム 自閉症児の子育てから (3)

すべての経験は成長の糧 - 無駄な勉強は一つもない - 岩崎 敦子(保護者、学園アドバイザーボード)

幼稚園や学校に通うようになると、娘にとって新しい経験がどんどん増えます。

学習の内容がその時点では無理かと思われることもありましたが、将来必要なのかと疑念を持つ内容もありました。そうは思っても、自閉症の娘を育てるのに自分の知識経験だけではとても難しいと感じていましたから先生の指導を信じて娘と一緒に頑張りました。5歳の頃、靴紐結びの練習では、紐のない靴を履かせれば良いと思いましたが、就職して現在娘がしている仕事の一部は刺繍糸やリボンを結ぶことなのです。

10までの足し算が出来るようになるのに半年以上掛かりました。小2の時です。家でも家族ぐるみで教えました。使ったノートは何十冊にもなりました。ところが次の引き算の理解には2ヶ月も掛かりませんでした。中学や高校では私が教えるのも難しい内容の数

学を勉強させました。現在はそれを覚えてもいないでしょうが、高度な内容まで頑張らせたことが基礎的な算数の理解をしっかりと固めたと感じています。正確に数を数えられることが就職の決め手になりました。

時計を読むのも教えている期間では習得できずデジタル時計を持たせていましたが、何年後本人がアナログ時計を欲しがるときには理解できていました。勉強したことを日々の生活の中で自分のものにして生かす力があると実感しました。アルファベットとローマ字や英語の学習は娘の楽しみを広げました。外国に行っても臆することなく外人に話しかけたり街に馴染んで、積極的に楽しみを見つけます。外国映画のビデオや外国語の音楽CDを買ってきて自分でも英語で唄っています。

楽しいことばかりでなく、悲しい場面も敢えて避けることなく経験させました。身近な人や飼い犬の死を体験し、

何年経っても悼む気持ちを表わす娘を見て、思いやりのある子に育ったと感動しました。

学習したものが直ちに結果が出なくても、そのものを習得できない様子でも、その努力がまったく違う分野で具体的な実力となって現れるのを何度も感じました。どこから空気を入れても風船が丸く膨らむように、どんな経験も娘の内部を充実させていくと信じられるようになりました。無理だとあきらめるのは親の身勝手だと自戒します。毎日ご飯を食べるように、毎日の勉強は子供の成長に欠かせないものです。少し高度な目標に向けて努力を続けることが大切です。

今では自ら進んで新しい経験に挑戦するのを楽しむようになった娘は、34才になってもまだ成長を続けています。



『暑中お見舞い申し上げます』



前略 蝉の大合唱に夏の訪れを知るこの頃、お元気ですか。子どもたちは、太陽の光を体一杯に浴びて活動できる夏休みを心待ちにしていることと思います。保護者の方にとっては、この休みをいかに過ごして9月を迎えようかと悩まれている方もおられるのではないのでしょうか？子どもたちは4ヶ月間精一杯努力を重ねてきたことでしょうから、ゆったりとした時間を楽しませてあげてほしいと思いますが、時間にゆとりがある時期だからこそできることも多くあります。そこで一つ提案です。親子で一緒に楽しみながら、同じ目標を持って取り組んでいけるものに挑戦してみたいはいかがでしょうか？親子で同じ課題をもって同じことをやることの意義は大きいと思います。

20年前に出版され、再販された『わたしの母さん』という児童小説が、最近、新聞のコラムで紹介されたのをご存知でしょうか？作者は、元養護学校の教師で、その方が実際に経験したことを元に書きおろしたものです。物語を簡単に紹介します。小学校4年生になった高子は、母が学校からのお知らせの漢字にふり仮名つけて欲しいと担任に頼んだり、日めくりカレンダーに封筒を貼りその中に2千円ずつ入れて生活費を管理する姿に何か違和感を覚えます。そんなとき、実は自分の両親は養護学校高等部を卒業したという事実を知ります。その事実を告げられたときの衝撃の後、高子は「だめだ、どこまで逃げて、母さんは母さんなんだ。よその母さんと、取り替えっこなんか、できっこないんだ」と気づきます。相談に行った診療所の先生からは「そうか。養護学校って、そんなにいけない学校か？(中略)高ちゃんは、学校の勉強がよくできるから、できないことは、はずかしいことだと思っているんだろう？(中略)学校の勉強が、みんなよりできるってことで、人間の価値が決まるんじゃないだろう？なにに価値を置くかが、問題なんだよ。高ちゃんはそうは思わないかい？」と問いかけられる。また、高子のおばあちゃん

からは、「高子の母さんも、3年生までは普通学級へ行ってたんだよ。(中略)『清子当番』というのがあってね。(中略)子ども達はみんな、当番表にマルをつけてもらいたいから、そりゃあ、もう競争で、世話をしてくれるの。清子は、まるで着せ替え人形のようなだった。(中略)学校でちから(能力)をつけてもらわなきゃいけないのに、自分では何もなくてもいい、口ひとつ利かなくていい、人形になっちゃって…。世間並みに、人並みに、と思う親の一心で、普通学級へ入れてもらったんだけどねえ。どんなに親切にされても、清子自身の本当のちから(能力)にはならなかった。(中略)たとえ、世間がレッテルをはったとしても、それを引っぱがすような、働きかけをしなければならぬのが親なのにね」という話を聞きます。そんな周囲からの言葉によって少しずつ変化していく高子の心の葛藤と自分より学習能力の高い娘に対する母親の心の葛藤、そしてそれを支える周囲の人々の温かさを軸に話は展開していきます。そして、ある事件の後、幼児や障害のある子を集めて春休みに読み聞かせなどをする塾をお母さんと高子と友だちの3人で開きます。その活動を通して、これまでと違った新たな両親との関係が少しずつ構築されていきます。

大人はとかく子どもができるようになることだけを考えがちですが、同じ目標をもって子どもと大人がお互いを高めあうために競ったり補い合ったりすることによって、お互いの関係をより深いものにしていきます。長い休みをそんな発想で過ごして見るのもいいのではないかと思います。子ども達にとりまして、保護者の方にとりまして何か一つ心に残る、楽しく有意義な夏休みになることを願っています。暑さ厳しき折、体調をくずされませんようお元気で過ごしてください。草々 計野浩一郎(教育センター副所長)